

事で御座います。

先生、私は、君の生前に就いて何も知りません。遠く離れて居ますれば、僅に、活字によつてつながる、縁し、あ、その縁し、私はその因縁に感謝し乍ら君の成仏を祈り度いと存じます。——取敢えずかう書きつけてお送りした。

半ば曇の生緩い午後の日を浴びて咲き遅れのげんげが誘ふふ様にあたりへ匂ふて来る。

### 閑かにもぼけし日ざしや桃の花 長頸子

君を偲ぶに相應しい日和である。

「一碗の茶」は君の絶筆でもあったものか。自からの病中に父君の死を迎えられた故でもあらうか。非常に気を付けて書かれてあるにか、はらず、ぐつと感傷に落ちて居られる。けれども文中のどこにも自分の、今にも来るべき死を微塵だにとは言はずとも、たいして感じては居られないやうである。「不幸にも父を病中に喪つた私は、いまなほ病床にこれを草しつ、ある。父の死に会うて十日……」と訴えては居られても、「まだ痛烈な悲しみも深甚な悼みの心も湧かず、寧ろ安らかな心に病を養つてゐる」と落ちつかれ、——「それら父に対するさまぐの心持は」と置かれては——「日を経るに従つて濃く且つ深く自づと私の心を領するに違ひない」とひそかに病後を期せられてゐる。だから一層淋しい。私のやうに、長い間の病褥にあつて不治にも近い身の因果を見極めてゐる者は、眼のあたり垂れ込めた黒い幕を通して見る死の影にも今は余りの驚きを案じなくなつてゐる。生への愛着は以前ほど強いとは云へない。時には、

我と我が身を虎口に投げ度いと思ふことさへないではないのだが。……

けれども君の療病の日子も決して短かくはなかつたやうだ。「一碗の茶」を書かれたのが——一三、一〇、三一——となつて居り、それから他界さる、まで約半年にも互る間悩まれて居るのだから、次第に重り行く病ひの経過を自覚されるにつれ「とても快くはなれない」と、そつと褥の上で呟かれた夜半があつたに違ひない。

「万一幾年後か幾十年後か、子として空想通りの大年の夜が訪れたならば、さうだ、私は一間に只独り居て、静かに一碗の茶を啜らう」と書かれた事の……幾十年後は愚か、幾月と言ふほどを待たずに、父君の後を追はれ、まこと空想ぐるみに短かい生涯を閉ぢられて行く事の大きな手違ひを苦笑された日のあつたに違ひない。

かうして、君の草された「一碗の茶」の末尾……

「その時こそ、亡き父を懐しみ、偲び、悲しむ、滂沱たる涙が、快く私の眼がしから溢れ落ちやう。……こそは、君自らを、懐しみ、偲び、悲しませるために綴られた、君自身へのとこしなへな弔辭となつてしまつたのである。噫

### 湯灌の燈そのま、にある蛙かな 長頸子

誦するともなく君の名吟が今又私の口に上つて来る。君の作られた句によつて君の死相を思ひ浮かべると、言ひ得ぬ錯綜した感慨に襲はれる。人の命の脆ろさ、絶ち難い宿命の継、あ、やつぱり長頸子君は亡き人の部なのであらうか。

が然し（が然し）私は改めて君の靈に告げる。

死は生の終末ではない事をである。死こそ本然の生である事をで